

ウェーバーの社会主義論

林 武

—

マックス・ウェーバーが社会主義を解説的に論評したことがあった。⁽¹⁾だが純粹に学問的論評でないだけにこれをもってただちに彼の社会主義観を云々することはつつましまなければならぬ。論評にあらわれた問題設定、問題関心の中に彼の基本的な学風や政治的態度などをうかがい知ることが出来る。ウェーバーにとつて社会主義は近代の克服でありえなかった。にも拘らずウェーバーは本格的な社会主義論を書かなければならない筈である。何となればあとに示す様に資本主義の経済学的認識において致命的な誤謬を犯しているからである。それを若し歴史的制約と学説史的事情の理由に帰せば、彼の社会主義の論評は大変更を受けたかも知れない。受けなかったかも知れない。何れにしろ興味あることである。

彼の社会主義論から様々の問題を我々はひき出す事が出来るがその人間的側面^{アンтропологія}を主としてとりあげるのが本稿である。確かにある意味では人間学こそウェーバーの中心問題であるから、私は好んでこの側面をとりあげるのである。⁽²⁾

(1) Der Sozialismus-Redezur allgemeinen Orientierung

von österreichischen Offizieren in Wien, 1918; *Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik*, 1924, Tübingen, SS. 492—518) 邦訳「浜島朗「社会主義」(「権力と支配」所収)

(2) たとえば社会主義社会における官僚主義の問題がそうである。「ソ連の行政整理」(毎日新聞一九九一年一月二二号) 添内謙「ソヴェト行政における統制組織の発展—官僚主義克服過程の一考察—」(社会科学研究四卷三号) 及び A. Jankeles; "Social Stratification and Mobility in the Soviet Union" (*Class, Status and Power*, ed. by R. Bendix and S. M. Lipset) を見よ。

(3) かかる見解は次のものに示されている。レヴィット「ウーバーとマルクス」(柴田 鵬、安藤訳)° Johannes Winkelmann; *Legitimität und Legahit*, (1952) Tübingen; Dieter Henrich, *Die Einheit der Wissenschaftslehre Max Webers*(1952) Tübingen; Hermann J. Grab *Der Begriff des Rationalen in der Soziologie Max Webers*, (1927) Baden. (なほこれについては、戸田武雄教授「ウーバーとソムニエ」の中に詳細な紹介がある。)

II

合理的社会主義 *rationaler Sozialismus* は生産手段の過剰にもとづく週期的な恐慌の産物であつて、マルクス、エンゲルスを創始者とし共産党宣言が基礎となる文献であるとウーバーは言う。

ウーバーの社会主義論は、先づ近代社会(=資本主義社会)

の特徴についての論及から始まるが「社会主義的な性格の政党とはずべて民主的な政党」であると規定している。民主制とは成員間に「政治権力の形式的な不平等が存在しない」ことである。だがかかる民主制が強調される理由は「民主制が大国家民主制であるところでは、どこでも官僚主義化された民主制になる」からであり、専門的教育をうけた身分的官僚階級が民主制の脅威になっているからだ、と言う。戦争(第一次世界戦争)もアメリカでは戦争御用商人でなく「大学と大学で教育を受けた社会層が主謀者である」と言う。

労働手段からの労働者の分離ということは官僚制の背後にある事実で、これとならんで営利企業に雇われている官僚制、即ち私的官僚制たるものが現代の特徴なのだ、しかし大集団の合理的運営のためには社会主義と言えども官僚制は不可避の機構で、ここでは、公的官僚制とはなるが決して官僚制そのものを排除しえないことを指摘する。

次いで社会主義の「本質」について論及してその中心的命題を次の様に要約する。「社会の私経済的な、いわゆる資本主義的な組織の没落を予言し、さしあたり——過渡的段階として——プロレタリアートの独裁によるこの社会との交替を予言している。とここでこの過渡的狀態の背後には、人の人に対するあらゆる支配を終らせないでプロレタリアートは自らを隷属から解放することとは出来ない、という固有な最後の希望が秘められているのである」と。

そして、この命題なくして諸個人の共同組織 *Assoziation der Individuen* は問題とならず、権力奪取の可能性も語られまいし、

共同組織こそ最終的狀態なのである、という。だが、ウェーバーは共産党宣言では、この共同組織が如何なる態様のものかを語らないことに「予言の書」共産党宣言の懸けている「希望」を発見している。

「予言の書」が資本主義の没落に次の様な理由を示しているとしてウェーバーは語る。

第一に、(ブルジョワ) 革命は挫折する。大量の慢性失業者を生み最低生活を保証しないことから社会が不安定となるから。

第二に、資本家同志の競争の激化が資本家力あるものの勝利に帰する。

第三に、恐縮の不可避性が資本家を脅かし他方プロレタリアー革命への気分を煽る。

これらについての論評はこうである。

第一の点については、資本主義の發展が歴史的にその様なものではなかったし(カウツキーが認めたことを言いつつも理論上の問題が残ることを指摘はするが)、事實はマルクスの言う様に資本主義が崩壊して労働者の独裁が進行するのではなく「職員」Angestellten (＝官僚 Beamten) の量的増大と優位とに終わった。労働者の独裁ではなく経営官僚の独裁こそ進行しているものに外ならない。

第二の点は、農業部門に、適切に妥当せず、弱小資本家の排除は金融資本、カルテル、トラスト組織への屈服という形で行われ、その内部での官僚制機構の膨脹は少数の大資本家対大多数の労働者という明確な対立関係にならないこと^{ヴェルケイニスター}によって失われてしまった。階級的利害の意識も、資本家に対してではなく職長に直

接向けられたプロレタリア化の一義的傾向は確認すべくもない。

第三については、カルテル結成以後、国立銀行政策などにより恐慌の危険の意義は相対的に減少した。そして、共産党宣言のブルジョワ社会没落の解釈は「経済生活が次第に社会化するのだから社会主義はひとりでは進化の道を歩む」との進化主義的解釈に道をゆづった。

以上の如きウェーバーの理論的説明と批判はきびしい反批判の対象たることを免れ得ない。だがそのことは本稿の目的ではない。ここではかかる所説における公分母となっている官僚制が、官僚制こそがウェーバーの資本主義社会の構造的認識の背骨であることを確認し、次いで社会主義になっても官僚制が不可避である限りいわゆる近代の克服ではありえないとするウェーバーの論拠にすむのである。

(一) *Wirtschaftsgeschichte*, SS. 250—251.

(二) *Sozialismus*, *ibid.*, S. 505 (邦訳「三一五頁」)

(三) マルクスがこの共同組織の具体的機構内容については、ウェーバーの社会理論の中で共同体が特殊な位置を占めることから理解される。合理的法律や近代国家にたすけられた貨幣のザッハリッヒな合理性が中世的共同体(＝都市であつて、そのエーラストは二重倫理であつた)を破壊して利益社会が出来上つた。尙この際ウェーバーは国家を共同体と考えている。血縁共同体を打破したのは合理的予言なのだが、かくして出来るゲマインデー——その最も重要なものは都市なのだが、近代資本主義の重要な母体となる、と彼は考へる。がここでは

それを指摘するにとどめる。なお共同体の変貌については、*Die Typen der Herrschaft, Wirtschaft u. Gesellschaft; Wirtschaftsgeschichte* を参照せよ。

(4) なお社会主義論では共同組織の萌芽的形態としての社会民主主義政党と労働組合の性格と政策とに触れているが、「社会主義的確信や希望をこの世からなくする手段はない」し「如何なる労働者層も何らかの意味で社会主義的である」と言い、問題は「国家的利益の立場から又目下のところ特に軍事的利害の見地からがまんでできるような社会主義になるかどうかである」と述べて、軍規保持のための弁で終わるのだが、そこにこの講演の目的と国民主義者としてウェーバーを知ることが出来る。

三

近代社会の組織は、不断の労働の専門化からして専門的教育を受けた知識分子による組織化なしに維持されえず、勤務者が物的経営手段から分離されているのであって、このことが近代社会の合理的特質となっている。かかる人事組織を官僚制とウェーバーは呼ぶ。そしてかかる知識分子の必要と増大とは資本のロゴスでもある。

官僚制は資本主義に不可欠のものではあるがしかし官僚制は資本主義の特製品ではない。にもかかわらず官僚制は資本のロゴスに仕えることによって形式的には最も合理的なものとなった。そして官僚制は近代の矛盾を表明するものとなった。ここでウェーバーの官僚制についての所説に立入ろう。

(一)権限分割の原則 (二)権限ヒエラルヒーの確立 (三)勤務者と物

的経営手段との分離 (四)文書主義の原則 (五)原則として自由な雇傭関係、⁽¹⁾というのが官僚制の私経済組織における社会学的特徴である。官僚制は、近代資本主義にとって合理的な労働力編成であつて、資本主義の即事物的な構造的・本質的性格たる資本計算性と収益性とに直結する能率的なメカニズムである。それは分業と協業の首尾一貫した合理的な作業体系である。勿論その合理性は技術的合理性に外ならない。従つてそれは所与の目標に奉仕するものでなければならず、自ら目標を決定する能力を持たない。資本制生産の下では利潤追求の侍女である。

かかる官僚機構の部分装置となつている諸個人のエニストは、現世的職業を神の召命として受けとりひたすらその業務に禁欲的に服した初期の産業資本家の職本観とは縁遠い「市民的職業観」である。⁽²⁾それは自己の神にではなく、悪魔に仕えることを余儀なくされている近代人の運命の表徴である。ここにウェーバーは近代の魔性を見る。官僚制が一人歩きするところでは、人はファウスト的な多面的人間ではなく専門的職業人・部分人である。「職業に精励すること」が最高の精神的文化的価値とは直接に関係し難いところ(又はこれと反対に経済的強制であると単純に考える必要のないところ)では、各個人は全然その意味を検討しようと欲しないのが普通である。

その結果は「精神なき専門人・感性なき享楽人 *Fachmenschen ohne Geist, Genussmenschen ohne Herz*」を産むことになるであらう。これこそ官僚制の究極の人間像である。目的を失つた技術の体系・自動的手段の体系の合理性はその双を内側に向ける。体系の合理化が合理化のために求められる。そのエニストは手段

を目的視するエートスである。資本主義体制では私企業の官僚制である故に諸企業の官僚制間には不均等な発展を伴う。だが、資本制（では勿論のこと）でなくとも官僚制は自己の組織内部においても全体的統一を妨げる様な部分的異常発達を伴はなければならぬ筈である。即ちセクト化である。

官僚制が革新されるためには、そのエートスが革命されねばならないが、それと同時にそれを実現する合理的的手段が設定されなければならぬということがその帰結となる。

目的と手段との適合的關係の上で評定される実質的合理性 *materiale Rationalität* と形式的合理性 *formale Rationalität* とは原則的に同調しえない。目的と手段との価値効果上の不統一は近代の合理化された社会での非合理性なのである。

ウェーバーの魂にとつては、形式的合理性を貴重な収獲として意識されながらも、それが実質的合理性を阻止している近代世界、その近代の矛盾を矛盾として受けとることなく機械的組織の中に情熱もなく感激もなく無感動にのろのろと動物的に生きる人間の姿が、痛恨事と映じたのである。

回顧されている多面的・情熱的・理想主義的人間像と、犠牲にする術もない技術の合理性との間に獅子吼するツアラツストラこそウェーバーのベルズンである。

近代の悲劇（「美しき人間性の時代との訣別」）は、制度の悪としてではなく運命として、しかも運命に抵抗しようとしていない人間の墮落と彼はみているのである。あまりに多くウェーバーのベルズンについて言ったかも知れない。だがデモンに仕える一個の人格が彼の精緻な論理ににじみ出ているのとすればその人間

的魅力に因られそうになる。

- (1) マルクスにも同様な指摘がある。 *Das Kapital*, Bb. III, S. 382, 長谷部訳（日評版）第九巻、三〇九—三一〇ページ。
- (2) *Wirtschaft und Gesellschaft*, SS. 124—130, u. s. w.
- (3) *val. Religionssoziologie*, Bd. I.
- (4) *ibid.*, S. 204（阿部訳「三一八—ページ」によつた。梶山訳 p. 二四五—ページ）
- (5) *ibid.*; S. 204
- (6) *Wirtschaft und Gesellschaft*, S. 59.

各人の専門にとちこもるのが運命である現代人に、^{ヤツ}仕事に帰えれ！ と呼びかけ、仕事に情熱を打ち込めと叫ぶ彼は、完全人の「断念」に支えられ、かたわら如何なる専門にも属さない専門人（「カリスマ的政治家」）に開連の鍵を托す。

ウェーバーは完全人への回復の契機をはっきりとつかむことが出来なかつた。マルクスは新しい共同体の形成の中にもとめた。その共同体運営のためにはウェーバーの指摘する点も貴重な発言である。ウェーバーは共同体形成のための合理的予言者の役を高く評価するのであるが、マルクスもウェーバーも共同体の中に人間性の回復と実現とを想定していたと考えられるけれども、共同体の形成以外にそれはありえないものであろうか。

資本主義の高度化が、労働者を吸収しては排除する過程がたまなくくりかえされ、吸収と排除との間隔が短縮される時には、労働の多面性と変職とが資本の合理性として要求されなければならない。この様な時人間の絶対的利用可能性、即ち「社会的細目

機能の単なる掘い手たる部分個人に換えるに、その者にとつては一種の社会的機能が相交替する活動様式である様な全体的に發達せる個人」が發生せねばならない。

労働の専門的分化の進行そのものが、(資本制生産の下では)永久的部分ではなく、瞬間的部分人を要求するのであり、個人は全時間過程において完全人になる筈である。かかる個人の發生は資本主義の「死活問題となる」。労働階級の共同的活動はかかる人間の成立をまもって歴史の強大な指導力と実践力となるであろう。彼の誕生は労働者を前衛として全人類の解放を目指すプロレタリアートの倫理を時代の理念とする。「歴史に對する責任」を労働者が自覚し、よき指導者を得た時「逞しい肩の人々」の手にブルジョワジーには重すぎる槍がにぎられるだろう、とは言っていたウェーバーだが、かかる自覚そのものを革命する力は超人間的な資質の英雄・予言者であることに原因すると言ふより、歴史における連統の場を持たない思惟方法の故に、カリスマ的指導者を歴史的連統の世界に位置づけられなかったことによると言わなければならない。それ故に確定出来なかつた「政治的成熟 politische Reife」の契機であり、見失われた人間性回復の歴史的条件であつた。

ウェーバーの問題関心が決定的・集中的にエーストの探求にあつたとは言ひながらも失業を資本主義の基本問題と考えなかつたその経済学的認識と不可分の関連にあると言わなければならない。勿論、このことはその特異なカリスマの社会学的研究を傷つけるものでもないし、情熱・責任感・洞察力を条件とする現代に必

要な政治指導者という規定が訂正される理由はない。だがかかる人物の誕生が必然性としてではなく偶然として想定されていたことが、そして指導者のみを渴望することがウェーバーの限界を示すものと言わざるを得ない。しかしながら、政治的成熟と指導者とが現代的情况が如何なる関係にあるかがウェーバーの内化のために主要な課題たることは残される問題である。

(1) Wissenschaft als Beruf (Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre) S. 592. (邦訳'尾高訳'七二ページ'出口訳'一六二ページ)

(2) Religionssoziologie, Bd. III, Wirtschaft und Gesellschaft u. s. w.

(3) (4) K. Marx, Das Kapital, S. 513. (邦訳'長谷部訳'三・三五一ページ) [日評版]

(5) Politische Schriften S. 289. (これは一八九五年フライブルグ大学の就任講演「合理的国家と国民経済政策」で初期のウェーバーの研究にのみでなく重要な論文である。なおこれについては山田雄三教授「ウェーバーの初期の経済政策について」(マックス・ウェーバー研究Ⅰ)所収)

(6) Ibid., S. 24. ウェーバーの政治論にとつてきわめて重要な概念であることを指摘するにとどめるが青山秀夫教授「マックス・ウェーバーに於ける国民主義と自由主義」(「マックス・ウェーバーの社会理論」所収)に展開されている。

〔付記〕

紙幅の制限で、必要な註、問題点の指摘、ウェーバーの社会主義論がなされた具体的・歴史的諸条件についての論及も割愛せねばならなかつた。又論及の必要なウェーバー的概念・用語についても同様の理由で果し得なかつた。